予算減で存続の危機に

1980年代末の日本DNAデータバンク（DDBJ）の状況は、順調とはいえなかった。DDBJを国立遺伝学研究所（遺伝研）に招致した丸山毅夫が87年末に急逝した。実務担当の宮沢三造には代表者としての仕事も積み重なり、疲労が限界に達しつつあった。

90年代半ばにはインターネットが普及し、データの国際的な交換や、ユーザー自身によるデータ入力が格段に容易になる。しかし当時、そんな見通しはなかった。所内ではDDBJへのてこ入れが懸案となっていた。

そのころ文部省科研費のゲノム研究班は、大量のDNA解読とデータ解析を行う国内拠点を遺伝研に設置する計画を進めていた。その拠点には、ゲノム研究班の情報部門を率いる金久實が着任すると見られていたという。

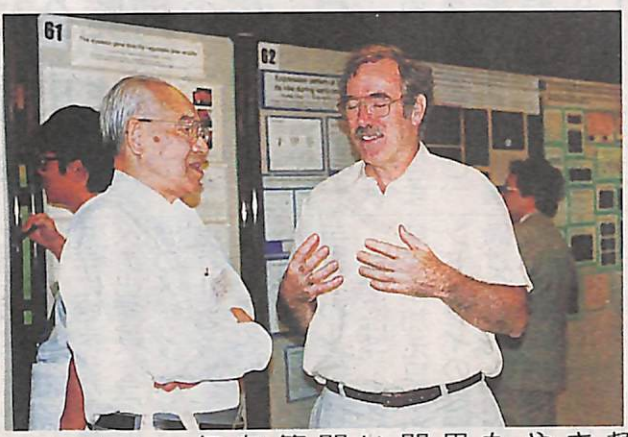
しかし遺伝研側が拠点の受け入れを拒否し、計画は頓挫。文部省は急きょ、複数の大学や研究所に打診したと言われる。結果として遺伝研は関係者の怒りを買い、「その後3年間、DDBJの予算はまったくつかなかった」と、90年夏にDDBJを引き継いだ五條堀孝は語る。

このような事態に陥った経緯についてはいろいろな見解があり、真相はわからない。

当時の遺伝研所長は、89年10月に着任したばかりの富沢純一だった。DDBJ初代運営委員の内田久雄や小関治男とともに日本の分子生物学の草創期を支えた一人だ。

遺伝研では生え抜きの所長が2代続いた後、新しい風を求め、米国で研究室を率いていた富沢を所長に迎えたと言われる。富沢の運営方針はどのようなものだったのだろうか。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）



1997年9月、三島市で行われた遺伝研国際シンポジウムに参加する富沢純一（手前左）